笑顔と心をつなぐネットワーク

HEARTful はーとふる

2020年 夏号

特別寄稿

いま、伝えたいこと

森 清範（京都 清水寺貫主）

山崎 直子（宇宙飛行士）

| 連載 |

環境問題を考える

われら明社人「明るい社会づくり運動 みなみ岩手推進協議会」

被災地レポート「特定非営利活動法人 Social Net Project MOVE」

NPO法人 明るい社会づくり運動

理事長就任の挨拶

この度、「明るい社会づくり運動」（以下、明社）の理事長に就任致しました。どうかよろしくお願い申し上げます。

皆さん御存知の通り、明社は１９６９年に庭野日敬師によって提唱され、発足以来51年が経ちました。現在、全国で５００を超える地区組織がそれぞれの独自性を発揮しながら活動しています。

昨年は、提唱50周年を記念して「伝統と革新」をテーマに記念大会を開き、大会宣言文の中で、この運動の目指す目標を再確認しました。「あったかい」「ほっとけない」「ゆずりあい」「ささえあい」「まもりたい」の象徴する価値が当たり前になる社会です。

そのために私たちが取り組むべき活動を４つに分けて整理・強調しました。これらの活動は、明社の皆さんがこれまで日常的に、しかも継続して取り組まれてきたものばかりですが、私なりに簡単にまとめておきます。

①若い世代を大切にし、明社の中で中心的役割を果たしてもらうための環境を整える。（革新）

②そのためにシニア世代・中堅世代の経験を生かす。（伝統）

③人と人との関係の原点を再確認して、明社が真に人間的なネットワークであり続けられるよう努力する。

④行政や国際組織も含めて、多くの団体や組織と確固たる信頼関係を築き、新たな活動も開拓しつつ実績を積み重ねる。

こうした活動はどれも、私たちが生きる上で一番大切な真実、物の豊かさ以上に心の豊かさを求めること、に根差しています。それを社会や世界全体に広げるために、たゆまぬ努力を続けていきましょう。

21世紀の世界は、環境や核兵器、経済格差等の大問題を抱えていますが、それら全てが未解決のまま、新型コロナウイルスが、未曽有の危機を引き起こしています。同時にそれは私たち一人一人が自らの魂と向き合い、人間として生きる意味を問い掛け、確認する素晴らしい機会にもなっています。その結果、政治家や専門家、少数のエリートに頼るのではなく、明社に代表される私たち市民の手によって、この危機を乗り越え、新しい時代に至る道が開けます。

眼は遠く輝ける未来を見据えながら、足元にしっかり力を入れ、一歩ずつ、仲間とともに、労わり合いながら前に進んでいきましょう。

秋葉　忠利
特定非営利活動法人明るい社会づくり運動　理事長

Contents

はーとふる2020年　夏号

【目 次】

理事長就任の挨拶
1……特別寄稿　いま、伝えたいこと
8……環境問題を考える――地球の未来を守るのは私たち！
10……われら明社人
13……被災地レポート
14……Palネット
16……第20回通常総会報告（概要）
掲示板
耀！連隊 明社レンジャー

表紙／岩手県花巻市の田園風景（素材提供・花巻市）

特別寄稿

いま、伝えたいこと

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックによって、
世界中が大きな混乱の渦に投げ込まれ、ライフスタイルの変化、
先の見えない自粛生活に不安を感じている人たちは少なくないでしょう。
そうしたなかで、いま、New Normal（新しい日常）が始まろうとしています。
今号は、清水寺貫主の森清範さんと、宇宙飛行士の山崎直子さんから
お寄せいただいたお話を掲載しました。
私たちはどのように日々を過ごしていったらよいのか――。
みなさんとともに考えてみたいと思います。

いま、伝えたいこと

森 清範

もり せいはん

京都 清水寺貫主

新型コロナウイルスと利他の精神

日常の激変

現在、新型コロナウイルス（以下、コロナと略称）が世界的な猛威をふるっています。皆さまも手指消毒や、マスクの着用、不要不急の外出自粛、人と極力会わないなど、様々な対策や心苦しい生活を過ごされていることと拝察します。また、ライフラインを守る方や、感染の危険と隣り合わせで働いておられる医療関係者など、全ての方々に厚く敬意を表します。

さて今年のお正月、このような状況が訪れることを、何処（どこ）まで予想出来たでしょうか。コロナの影響で、日常生活がわずか数ヶ月で激変してしまいました。人が集まって仕事をしたり、安全であった仕事の場が、急に感染リスクの高い場所になったり、自由に移動し旅行へ行ったり、劇場に集まり演劇をみたり、集まり酒を酌み交わしたりという、ごくごく当たり前であった日常が、非日常へと変わってしまいました。

この日常の大転換を起こした原因を考えるとき、未知のウイルスに対する不安感など様々な要因があります。なかでも、その一つとしてコロナの特性である「不顕性感染」があると考えます。「不顕性感染」とは、自らがコロナに罹患（りかん）しているにも関わらず、症状がないという状態です。しかも、無症状であっても、他者にコロナをうつす可能性があるということです。言うなれば、何ら違和感なく普段の生活を送っていても、もしかすると、他者に感染を広めているかもしれないということです。

私たちは、見える命とこれを支える見えない命によって活かされているのです

このようなことから、「Physical distancing」（フィジカル ディスタンシング）という、人との物理的距離を取ることや、手指消毒やマスクの着用、不要不急の外出自粛、人と極力会わないなどの行動変容が提示されました。また令和二年五月七日には、厚生労働省は「新しい生活様式」を発表しました。そこには、人とは二メートル（最低一メートル）距離を置くことや、食事は横並びで座り、食べることに集中して極力話さないようにするなど、多数の具体的な項目が挙げられています。今までの日常生活の感覚では、考えられない状況が思い描かれます。このような新しい日常は、「New normal」（ニューノーマル）の世界とも言われます。

他者の命を尊ぶ行動

ところで、今述べた「New normal」の世界を考えるとき、あらゆる行動の大前提になることがあります。それは、自らが罹患しているかも知れないということです。つまり、もし無自覚で自分が罹患していたとすれ

ば、他者に感染させてしまい、場合によってはその人の命を、危険にさらすことに成りかねないと言うことです。

この前提は、換言すれば他者を慮った行動、すなわち、「他者の命を貴び敬う行動」が求められると言えます。これを仏教では、「利他行」や「菩薩行」と言います。生きとし生けるもの、全てに普遍的且つ平等にあるものが命です。しかも私たちは、見える命とこれを支える見えない命によって活かされているのです。それらの多くの命を、お互いに貴び敬い守る「利他行」です。

このような視点から、今一度、身近な手指消毒やマスクの着用などの行動を考えると、他の人がしているからという同調圧力的な捉え方ではなく、他者の命を貴び敬う行動の一つとして、積極的に捉え直す必要があるのではないかと考えます。

思いやりある真の社会

しかし、現実社会に視点を転じますと、医療従事者への偏見や罹患者への差別など、さまざまな社会問題が発生しています。その背景には、未知のウイルスに対する不安感や、罹患する恐怖心によって高まる自己防衛意識があると考えます。しかも、この意識の高まりが他者に向いたとき、自分の感染予防の基準によって、感染予防に無関心な人を見てしまいます。その結果、苛立ちや怒りを感じ、排除や攻撃の対象として捉えてしまいます。いわゆる「自粛警察」と言われるような、社会的集団ヒステリーとなります。更に、コロナと直接的ではない差別なども、複雑に顕在化しはじめているのではないかと思います。

もし何もしなければ、この社会的な傷口は更に悪化します。しかもこの事態は、ワクチンや治療薬などが確立し、コロナが人類のコントロール下の病気となるまで続きます。

このような状況にあっては、まずはコロナに対する科学的な正しい理解が必要です。そして、これからのあらゆる行動の前提には、一人一人が他者の命を思い、想像することが必要です。

あらゆる行動の前提には、一人一人が他者の命を思い、想像をすることが必要です

このことは今に始まったことではありません。先人より今に至るまで常に世に訴えられてきました。しかし、今回のコロナウイルスは、皆が理解するだけではなく、実際に行動に移さなければ、他者の命、ひいては自らの命を守ることができません。今、まさにその岐路にあるからこそ、みなさまが邁進される「明るい社会づくり運動」が、より大切な活動であるのです。

今後、新型コロナウイルスと共存せざるを得ない世界において、互いに命を守り、思いやりある真の社会を目指す「利他行」を、共に精進したいと思います。

もり　せいはん

昭和15年、京都市清水に生まれる。昭和30年、京都 清水寺貫主・大西良慶和上のもとで得度。昭和38年、花園大学文学部卒業とともに、京都府八幡市の円福寺専門僧堂（臨済宗妙心寺派）に掛塔（雲水修行）する。真福寺住職、清水寺法務部長、泰産寺住職を経て昭和63年、京都 清水寺貫主・北法相宗管長に就任し、現在に至る。著書に、『人のこころ　観音の心』（日本経営協会総合研究所）、『心を活かす』（講談社）等がある。

いま、伝えたいこと

山崎 直子

やまざき なおこ

宇宙飛行士

地球は一つの宇宙船。みんなで力を合わせて……

(C)MIWA KATOH

自分のできることを集中して取り組む

先の見えない不安を抱いたとき

今回の新型コロナウイルス感染症の拡大で特に感じたのは、世の中は、「協力」や「助け合い」で成り立っているということです。スーパーに物が並ぶこと、それはそこまで物を届けてくれる人や働いてくれる人がいるということ。休校になって子どもたちが家での時間を持て余している状況でしたが、そうしたときにオンラインで学び場や、子どもたちがアクセスできる楽しいコンテンツを無料や低価格で提供してくださる方々がいることなど、親の私にとっては、とてもありがたいことでした。

しかし、緊急事態宣言が解除されてからも、コロナウイルス感染症拡大の影響は続いており、長期化する可能性があるとなると、「この先、どうなるのだろう」と不安を抱く方も少なくないのではないでしょうか。

「あと数週間、がんばれば大丈夫」といったような区切りが見えていると「では、そこまでがんばろう」という気持ちにもなれますが、先がはっきりと見えないのが現状です。

私自身のこれまでのことを振り返ってみると、不安になるときや悩むときというのは、自分ではなかなかコントロールできないことに直面したときでした。

宇宙飛行士としてさまざまな訓練をしていても、計画の変更や不具合や事故があるとミッションの見通しが立たなくなってしまうことがあります。そうしたとき、どうしたらよいのか……。私の場合は、自分のできることを集中して取り組むよう心掛けました。

天候や自然もそうですが、自分でコントロールできないことは、ある程度、受け入れて、そのなかでも必ず自分にできることがあり、よりよく進んでいけることがあると信じて集中していくと、不安はなくなっていきました。そして、「次はどうしたらいいのだろう」と、少し思考が前向きになっていくという経験をしてきました。

視点を変えてみる

また、いまは多様性の社会といわれ、人種・性別・年齢などに一切関係なく、すべての人々が自分の能力を活かしていきいきと働ける社会が実現しようとしています。日ごろはライバルである企業同士が提携して、この局面を乗り切るために取り組んでくださっていることは望ましく、うれしいことです。まさに「呉越同舟（ごえつどうしゅう）」という言葉がぴったりのように感じています。

呉越同舟というのは、仲の悪い者同士や敵味方が、同じ場所や境遇にいること。本来は、仲の悪い者同士でも同じ災難や利害が一致すれば、協力したり助け合ったりするたとえで

宇宙から地球に戻ってきたときに、地球上の当たり前の何気ない景色がいちばん美しいと思えました

すが、いま、コロナウイルスで多くの人が感染していくなかで、それぞれ立場があり、一人ひとり考えも違います。完全に一緒になれることはないかもしれません。しかし、それでもみんな一つの宇宙船に住んでいる運命共同体だという意識をもつことができれば協力できるはずなのです。

宇宙飛行士のグループのなかでも、みな仲間であると同時に、ライバルでもあります。ところが、少し視点を変えて同じ志をもつ者と考えると、自分のミッションよりもむしろ力を入れてサポートしたくなるのです。それは、誰かのミッションが失敗してしまうと宇宙開発自体が頓挫（とんざ）してしまうからでもあります。時には、計画がそこで止まってしまうかもしれないという危機意識をみんなで共有し、一つ一つのミッションをきちんと進め、うまく成功させることが、自分にとってもプラスになっていくことを実感しているのです。

地球上でも、目の前のことばかりを見ていると、会社や立場が違うとか、意見が合わなくて許せなくなるなど、いろいろ思いが引き出されることがありますが、少し視点を変えて、宇宙から地球を眺めるような意識をもって考えてみてはいかがでしょう。

宇宙から見ると、地球は、ぽっかり浮かぶ一つの宇宙船のように見えます。その宇宙船に、私たちみんなが住んでいるということなのです。宇宙に行ったときも、宇宙から見た地球はもちろん美しいのですけれども、最後、宇宙から地球に戻ってきたときに、地球上の当たり前の何気ない景色がいちばん美しいと思えました。そよ風であったり、緑のかおりだったり、土の感触だったり、普段は当たり前だと思って目にも留めないようなものですけれども、でも、あらためて見ると、本当にありがたいな、とものすごく感動しましたね。そうした思いを忘れないようにしたいと思います。

日ごろ社会をよりよく、明るくなさっているみなさんの活動に、私は非常に感謝しています。世の中のいろいろなご縁だとか、本当に小さいことかもしれませんが、行動の積み重ねを大切にしたいと私も思います。さらにみなさんの運動が広がっていくことを願っています。

(C) JAXA/NASA

やまざき　なおこ

千葉県松戸市生まれ。宇宙飛行士。東京大学大学院工学系研究科修了後、宇宙開発事業団（現JAXA）に入社。国際宇宙ステーション（ISS）の開発業務に従事しながら宇宙飛行士を目指し、入社3年後の1999年、2度目の選抜で宇宙飛行士候補者に選抜された。2006年2月に、アメリカ航空宇宙局（NASA）の搭乗運用技術者に認定され、2010年4月5日（日本時間、以下同）、スペースシャトル・ディスカバリーに搭乗。ISSの組立補給ミッションに従事した後、17日にディスカバリーでISSを離脱し、20日ケネディ宇宙センターに帰還した。2012年7月、内閣府宇宙政策委員会委員、2014年4月、女子美術大学客員教授などに就任。著書に『何とかなるさ!』（サンマーク出版）『夢をつなぐ 山崎直子の四〇八八日』（角川書店）、『瑠璃色の星』（世界文化社）他。